

ペーパー社員となり、給料の送金のみを受けて洋裁や編み物をしていたが、昭和二十六年になって、日本キリスト協会柳川教会付属保育園に勤めることとなった。戦後、保育園が急増して保母資格を持つ人が不足してきて、福岡県庁が講習会を開催し、保母資格試験を行ったので、私も福岡市で受講し、資格試験に合格した。その後、昭和三十年の春まで約四年間、保母として働いた。しかし、柳川で一生を過ごすつもりはなく、いつか東京に出たいと考えていた。

昭和二十七年に上京した弟は、アルバイトをしなが
ら中央大学の第二部に入学した。

私も、昭和三十年の春、保育園を退職して、苦労を重ねた柳川での八年間の生活に終止符をうち、待望の東京に母と共に向かった。それから今日まで続いている、東京での新しい生活が始まったのである。

亡くなった兄が、入隊する日の朝に一冊の大学ノートを私に託した。表紙には、「鳥の声」と書かれてある。東大入学から、召集令状を受けて大学を去り、大連駅で別かれる日までの、わずか数十日の学生生活を

綴った日記であった。

あの大戦下に育ち、そして掛け替えのない青春を送り、二十年にも満たない短い一生であった若人の言葉を読むとき、肅然として襟を正しめるのである。

ごめんね、正人

神奈川県 須藤 喜美代

一 赤紙

大連駅から歩いて約三十分のところ、松風台と呼ばれる小高い丘があった。そこに日本人だけが住んでいる、鉄筋コンクリート建ての住宅が並んでいた。今という団地である。そのうちの棟の三階に私たちの家族は住んでいた。

昭和十八（一九四三）年五月に結婚してここで暮らすようになり、昭和二十二年二月に日本へ引揚者として帰国するまで、幸せな日々と苦しみの日々を過ごした。

白系露人が築いた大連の街は、白い建物、広い道路、そしてアカシア並木の美しい所であった。戦争戦争と、明け暮れ言い暮らしていた内地の毎日が嘘のように、出征兵士とか、戦死とかという悲しい言葉を聞くこともなく、戦局の推移にもあまり影響されず平和な毎日の生活であった。「召集逃れ」と、他人に避難されながら、姑は私たち夫婦を大連に送り出してくれた。農業関係の学校を出た夫は、満鉄系の農事会社へ就職し、満州各地の農場を巡回して農業指導にあたっていた。

仕事柄、夫は出張が多く、私は「アスカエル。」という電報をいつも待ちこがれていた。電報が入ると、私は大連駅へ迎えに行き、夫とアカシア並木を歩いて帰るのが何よりの楽しみであった。それ故に、夫婦仲はいつも新鮮で、新婚気分から抜け出せないままに、長男の正人^{まさひと}を出産した。

その出産のときも夫は出張中で、産気づいた私は一人で産院へ行き、そして洋車^{ヤンチュウ}(人力車)に乗って、正人を抱いて一人で退院した。その翌日に夫は、米、大

豆、落花生、果物などを山のように背負って帰ってきた。

世話好きで、いつも何かと面倒をかけていた隣りの柳瀬がきて、てきばきと片づけてくれた。

昭和二十年に入ると、十二戸一ブロックの自治会の集まりで、男たちは、「この戦争はもう長くはないな、ひょっとすると……」と、口にするようになってきた。私たち女性もこの戦争がただならぬ局面に向かっていることに薄々気付きながらも、まだどこか遠くの出来事のような気持ちであった。

ここまで追いかけてはこないと思ひ込んでいた赤紙(召集令状)が、だんだんと身近なものになり、目を赤く泣きはらした新妻と、生まれて間もない赤子を残して、一人、また一人と男性は姿を消して行った。それでも私は、夫には来ないと思ひ続けていた。

ある日、一度空襲のサイレンが鳴ったが、何ごとも無く過ぎた。「この次は、艦砲射撃があるぞ！」という噂が広まってきた。「あなたは満鉄関係だし、食糧の仕事は大切だから赤紙なんかは来ないわよね！」

と、私が繰り返して言うると、夫は「さあなあ」と笑っているばかりであった。

いつものように電報も打たずに、予定よりも早く出張から夫が帰ってきた。「仕事が早く片付いたので一日早く帰ってきた。あしたは会社を休んでのんびりするから、朝、起こすなよ！」と言った。翌朝、まだ薄暗いころ、「こつ、こつ」と、だれかがためらいがちに戸をノックしている。「きたっ！」と夫は跳ね起きた。戸を開けると、顔なじみの坂下の交番の巡査が敬礼して立っていた。巡査は、ちょっと気の毒そうにして、夫に一枚の薄い桃色の紙を渡すと、また敬礼して階段を下りて行った。桃色の赤紙であった。入隊は三日後の七月二十四日である。

「行かなくちゃいけないの？ すっぱかしたら」と言う私に、夫は「そうはいかんよ」と、苦笑いをしていた。昨年正人を産んだ私は、もうこの十月半ばには次の出産を控えていた。冗談じゃない。こんなときにと心の中で叫んでいた。しかし、夫は驚いた様子もなく、「会社へ行って来る。今日は帰れないかもしれないな

い」と慌ただしく出かけたままで、帰ってきたのは入隊日の朝であった。

「私が千人分の思いを込めたから」と、柳瀬は自分一人で刺した千人針を用意して、夫の帰りを私と一緒に、やきもきしながら待ってくれた。

正人を抱きあげた夫は、私に正人を戻すと、「きつと帰って来るから、ここを動かぬ」と言い、階段の下では、「送ってくるな！」と、手で制して急ぎ足で消えていった。別れを惜しむ暇も無い、あつけない慌ただしい出征であった。夫の姿が見えなくなると私は部屋に駆け戻り、初めて大声をあげて泣いた。それにつられて正人も泣いていた。さんざん泣いてほんやり座っていた私に、柳瀬は自分も目を赤くしながら、「さあ、さあ、もうしゃんとして、元氣を出さなきゃ。坊やが育たないわよ、お産もあるのに、男がいなくても子供を育てて生きて行かなくちゃ」と、半ば私をしかりつけていた。

二、三日して会社から迎えがきて、私は初めて夫の会社を訪れた。出迎えた社長は、夫の出征をねぎらい

米、大豆、落花生、瓜などを用意した馬車ウマクルマに積み込み、「困ったことがあれば、いつでも相談に来るよう」に」と、二カ月分の給料を前渡ししてくれた。この穀類は、夫が三日間農場を駆け回って集めたもので、他の出征家族や社員にも分配されるという。「会社はもうおしまいなんだ。いよいよだ」と私は自分に言い聞かせました。

大連造船に勤めている岡村と、中国人の雑貨屋で働いている安居には赤紙が来ない。自治会の世話役をしている岡村が、ある日三十センチメートルぐらいの銃とがって光る物を持ってきた。銃の穂先だという。「アメリカ兵が上陸してきたら、これを槍に仕上げて一人一殺、命がけで戦って日本女性の誇りを見せるように」と、真面目顔で言った。岡村が帰った後、私は笑い出してその槍の穂先をペランダの隅に放り出した。

軍服のボタンホールかがりの奉仕作業が各戸に持ち込まれたが、それはたったの一回だけであった。十二戸のうち、出征した家は八戸。柳瀬は、和子という五

歳の娘と二人暮らし。塩川は中年で五人暮らし、既に一人息子は現役の兵隊として牡丹江に行っているという。安居は幼い子供三人を抱え、その妻も一緒に雑貨屋へ手伝いに通っている。安居はなぜかいつも酒に酔っていて、天皇陛下の悪口を言い、この戦争を非難し軍部をののしっていた。内地にいれば、とつくに捕まっているところであろう。

八月に入って間もなく、岡村が「青酸カリ」の入った小瓶を持ってきた。ひと口飲めば死ぬるといふ。「ソ連兵が入ってきて、方一のことがあったときにはこれを飲んで辱めを受けないようにして、女の操を守り通すように」と言う。やれやれ、えらいことになったものだと思った。私が死ねば、正人はどうなるだろう。夫は、「きつと帰って来る」と言っていて出て行ったのではないか。死んでたまるかと考えた。

二 女の戦争

昭和二十年八月十五日、せみ時雨の中を岡村の家に集まった。ラジオがあるのは岡村の家だけだった。大連新聞に、今日正午に、重大放送があるのでみんな聞

くようにと書いてあった。みんなが集まって膝をそろえる。天皇陛下の玉音放送というが、玉のみ声ではなく陰にこもった声で、聞き慣れない抑揚のついた話し方で何のことやらよく分からない。みんなが顔を見合わせていると、「終わった！ 終わった！ 戦争が終わったのだ。負けたんだ。やっとな終わった」と、安居が大声をあげてみんなに話しかけた。その妻も、「そうか、終わったんだね。よかった、よかった」と、三人の子供に話し掛けていた。岡村の妻は安居一家をにらみつけて、「いいえ、戦争は終わってはいません。国民一丸となって戦うようにと励まされたのですよ。たとえ内地にいらなくても、私たちは天皇陛下の赤子なんですよ」と、ややヒステリックに近い声を荒げて、「あなた方のように、満人に使われている非国民には、ちゃんと聞こえないのよ」と続けざまに言った。「結構、結構、非国民、結構。おい行こう」と、安居は妻や子供を引き連れて出て行った。次いで柳瀬が口を開いた。「私も戦争は終わったと思うわ。須藤さん、これで旦那さんも帰って来るわよ。よかったね。よかつ

たね」と言ったが、その柳瀬へ岡村の妻が言葉を浴びせた。「この非常時に、妾の分際で、のんきにそんなことがよくも言えるわね」。私は、はっと胸をつかれて柳瀬を見た。薄々と気付いてはいたが、まさか面と向かって口にするとは。柳瀬は顔色も変えずに、「だからどうだと言うのですか。お宅のお世話になっていくわけではなし、迷惑をかけたわけじゃなし、私が戦争の勝ち負けに関係した覚えはありませんよ。どうぞ自分一人で戦争をなさったら」と、終戦を告げたはずの重大放送が、女の戦争を引き起こしてしまった。一緒に外へ出ると、柳瀬の子供の和子は何事もなかったように母親の回りをスキップしている。柳瀬は黙って歩いてしたが、やがてぼつんと、「そうなのよ、私」とつぶやいた。私も黙ってうなずき、正人を強く抱きしめた。

静岡の出身で、芸者となって満州へきた柳瀬は、すぐに景気の良い軍需工場の経営者にひかれて、和子を産んだという。勝気な柳瀬は独学で、洋裁、和裁、料理を身につけ、読み書きも勉強したとのこと。旦那は

月に一、二度来ては泊まっっていく。私も一、二度見かけたが、五十がらみの温厚そうな小太りの人であった。敗戦となると、柳瀬の生活もその旦那もどうなることかと、他人事ながらも気に掛かってきた。

三 敗戦後の大連

八月十七日、岡村がソ連の赤い小旗を配ってきた。

「明日、十八日の正午に、ソ連軍が進駐してきて坂下の大通りを行進するから、この小旗を振ってウラーと叫んでほしい。ウラーは万歳という意味だ」と言う。

「ウラーね」。私はその小旗を正人に持たせた。柳瀬も、和子に旗を持たせて笑いながら入ってきた。「槍と薬とウラーね。まるで三題噺ね。ねえ、どうするの」。私が「嫌よ。行かないわよ」と言うと、柳瀬は「そう、坊やも小さいし、そのお腹で無理することないわよ。私は行って来るわ、どんなものか見てくる。滅多に出合えることじゃないでしょ」と言っていた。

八月十八日正午、サイレンが鳴り響き、やがて駅の方角から音楽と喚声の波が寄せるように聞こえてきて、坂下でそれは最高潮に達し、次第に遠のいていっ

た。しばらくして柳瀬がおを紅潮させ、息を弾ませて帰ってきた。「日本の軍隊とは大違いよ。音楽隊を先頭にして、兵隊は大声で歌いながら、周りへ手を振ったり、笑い掛けたり、話し掛けたりしてね。それに女の兵隊がいるのよ。きれいに化粧して軍服を着てるの。驚いたわ。今まで熊みたいに思っていたソ連兵も、一人一人をよく見ると、とても人が善さそうよ」と興奮していた。

その、人が善さそうに見えたソ連兵が、その夜から恐ろしい獣の姿を現してきた。「女は外へ出るな。特に日が暮れてからは絶対に外へ出るな」という触れが回った。酔ったソ連兵が、「マダム！ マダム！」とわめきながら日本人の女を追いかける。「女を出せ」と日本人の家をたたき回り暴れる。マンドリンという肩からさげた自動小銃を乱射する。バリバリバリと、豆が弾けるような音が壁やガラス戸に跳ね返り、窓ガラスの割れる音がする。

柳瀬が顔色を変え、和子を連れて飛び込んできた。ドアを施錠し、チェーンもかけて、いすや布団を積ん

で、私たちは風呂場へ隠れた。まんじりともせぬ一夜を過ごした。柳瀬はそのまま朝になっても自分の家へ帰らないで、朝のうちに交替で坂下へ買い物に行き、共同炊事をして、柳瀬親子と私たちは本当の家族のように身を寄せ合って過ごした。

踏み込まれて、家族の前で暴行された主婦。「私が犠牲になるから」と言って、他の女をかばって自らソ連兵の相手を買って出た人。男手の少ない松風台は、ソ連兵の餌食の場となった。しかし青酸カリを使ったという話は聞いたことがなかった。

夫が応召してちょうど一カ月たった八月二十四日の昼過ぎ、ドタンドタンと階段を上ってくる足音が、ドアの前でびたりと止まった。「きたー!」とばかりに私たちは、風呂場へ逃げ込んだ。ドンドンとドアをたたき、「おい。おいだ、おいだ」との声、紛れも無く夫の声である。慌てて積んである荷物をどかしてドアを開けると、黒い汗を滴らせた髭面の夫が入ってきた。

「あなた!」と一瞬ぼかんとしている私に、夫は、「おいだよ」と、もう一度声をかけて、汗臭い胸に乱

暴に私を引き寄せたが、すぐにはっとして私を離れた。私の後ろに、柳瀬が立っていたのだった。

玄関先で汚れた服を脱ぎ、風呂の沸くのを待ち切れずに、何杯も水をかぶった。慌てて用意した食事をかき込むように食べた。畳の上に大の字になって、すぐにいびきをかき始めた。

柳瀬は自分の家から酒を持ってきて、私と一緒に台所で、いつもより手間暇を掛けて食事を準備した。

「よかったわね、よかったわね」と、柳瀬は私や正人に何度も声を掛けた。眠り続ける夫は、バリバリバリという小銃の音でがばっと飛び起きて、やっぱりなと苦笑いをして、「仕様ががないな」と言って、また寝てしまった。

遅くなってやっと目を覚ました夫は、私と、正人と、そして柳瀬と和子の賑やかな夕食をとった。柳瀬は、間断なく夫に話し掛けていた。夫が帰って四日目の夕方に柳瀬は、「怖いけれども帰るわ、これ以上のお邪魔はできないわ。気の利かないことで、御免ね」と言って、自分の家へ引きあげた。

夫は奉天の部隊に入ったが、部隊は寄せ集めの兵隊がいるだけで、まともな武器もなく、役に立ちそうもない銃剣術の訓練に明け暮れて終戦を迎えたそうだと。終戦翌日の十六日に、仲間を募って脱走を謀った。しり込みする者もあって、結局十人が、将校室から拳銃、日本刀を持ち出し、軍足に米を詰めて腰にぶら下げ、部隊を抜け出し、以前、会社の仕事で度々訪れて仲良くなっていた王という農場主を頼って行った。王の家族は、兵隊姿の夫と十人の仲間を恐れて隠れたが、王は快く一同をひと晩かくまい、翌日には十分過ぎる弁当を全員に持たせて、行けるところぎりぎりまでトラックで送ってくれた。

その後、延々と歩いたり、貨物列車に乗ったり、また歩いたり、時には石炭車の中に隠れて、「ここまでは」といわれて大連駅の一つ手前の「入船」という日本名で呼んでいた駅に下ろされたとのこと。夫の持ち出した拳銃と日本刀は、王に預けたと言う。入船に着いたときには、十人の仲間は夫一人になっていたとのことだった。

「どこ行くか？」と、不意に朝鮮なまりの男に声を掛けられ、「大連へ」と答えると、男は自分の自転車の荷台に、「乗れ！」と夫を乗せ、息を弾ませ汗まみれになって、一時間近くも自転車を走らせて夫を下ろした。そこでこぎ手を交代して走ったとのもので、何となく親しみが持てる男だったが、大連駅があと一息というところで、男は大連市内の市電の切符を一枚渡してくれた。夫は、米の入った軍足をつまみ差し出した。男は黙って受け取り、名前も告げずもとの道へ走り去ったという。

目に余るソ連兵の行為にソ連軍の憲兵が動き出して、やっと小銃の音は聞こえなくなったが、強盗、強姦は相変わらずで、中国人や日本人までもが便乗して、盗みや詐欺などの犯罪は日常茶飯事。それでも暴動や、日本人とソ連兵の衝突が無かったのは、せめてもの救いであった。

四 悲喜こもごもの生活

ある日、思い掛けず奉天からの客があった。主人を救ってくれた農場主の王である。米、豚肉、卵を背

負って、夫の安否を氣遣ってきてくれて、無事に帰っていたことを喜んだ。夫と王は、涙を流し抱き合い、私には一言も聞き取れない中国語を激しい口調で交わし、肩をたたき声をあげて笑っていた。

私は、夫がこれほどまでに流暢な中国語がしゃべれることと、現地の人々の心に溶け込んでいることに驚き、ほればれとして夫を見つめて、訳も分からないままに一緒に笑い、うなずいていた。

柳瀬が坂下へ酒を買いに走り、夫と王を囲んでの酒宴となった。王は一晚泊まって帰った。駅まで送って行った夫は、王から奉天に來ないかと誘われたと言う。「日本に帰らずいっそのこと奉天へきて自分の片腕となって農業を手伝ってほしい、須藤にはこの大陸が向いていると思う」。大連の知人の住所、名前を書き、「ここに連絡してくれば、いつでも迎えに來る」と言っただけで別れたそう。胸がつまり体ごと心を揺すぶられた。「どうだ？ どうする」と、のぞき込むようにして問い掛ける夫に、私はしばらく黙り込んで考えたが、「でも、帰りたい」と、涙声で答えた。夫は、

「そうだろうな」と、一言つぶやいたきりで、この話に二度と触れることはなかった。

夫は、つかの間、トラクターを運転し、また、広い農場を馬に乗って走った。もう日本人を捨てた自分の姿を思い描いていたに違いない。

終戦前、みんなが「シー、シー、ニーヤ」と呼んで、日本人の家庭を回って掃除、洗濯をしてくれた。回って來る人は同じ顔であった。夫が留守がちで寂しかった私は、「シー、シー、ニーヤ」が來ると必ず一緒に茶を飲んだ。彼女は、出された菓子には一度も手をつけずに持って帰る。聞けば子供が三人とのことで、私は時々三人分の菓子を別に包んだりした。

ある夕方、裏の窓の下で、「ホウ、ホウ」と呼ぶ声がする。見ると、「シー、シー、ニーヤ」がざるを片手に持ち、片手をあげて笑っている。どうやらひもを下ろせということらしい。着物を着るのに使うひもをつないで垂らすと、それにざるをくくりつけて上げると台図をする。ざるはかなり重い。上げて見ると、中

には手焼きの春巻オエレンゼンと、生のサツマ芋、ばらの紙巻タバコが小さな箱に入っていた。ざるを下ろして、「シエ、シエ」と、手を振ると、「シー、シー、ニーヤ」も手を振って走り去った。

自分たちも仕事を失って楽ではないのに、出産近い私への贈り物と、別れのあいさつであった。

主人と一緒に応召した八人のうち五人が、ぼつりぼつりではあるが家族のもとへ帰ってきた。五人目に帰ってきた吉沢の妻は、帰りついた夫と入れ替わるように幼い子供を残して息を引き取った。夫がまだ帰らない人たちに、「大丈夫よ、もう間もなくよ、きつと帰って来るわよ、それまで頑張らなくちゃ」と、慰め励まし合っていたが、この言葉もいつの間にか決まり文句となって空しくなり、そのうちに顔を合わせても互いに黙って行き違ふようになった。

ロシア語、中国語、朝鮮語、日本語が交錯する大連で、職場を失った男たちは、「なつとうなつとう」と大声で物を売り歩いていた。坂下の中国人の商店街に露天を出し、芋のパン、うどん、そば、古着などを並

べて、ソ連兵や中国人に声をかけ愛想笑いをする。ソ連兵に肩を抱かれて歩く女の姿も珍しくなくなり、あの輝いていた日本人の、この変わり身の早さに驚き、呆れて、このたくましさに夫や私はついて行けるだろうかと不安になった。ある日、小柄ではあるが、目つき鋭い男が若い男を連れて、建物の下で、いきなり

ダーンと拳銃を発射してから階段を駆け上ってきた。小柄な男は、夫の胸に拳銃を突き付けた。ぞつとして全身の血が引いた。男は、「おれたちはソ連軍司令官の命令で動いている。お前が脱走兵ということが分かった。これから司令部へ連行する。抵抗すれば撃つ」と、高圧的な口調で言い、肩の所まで手を上げている夫の胸を拳銃で小突いていた。私は正人を抱きしめて、体の震えに耐えた。「おいっ」と男はおも夫を小突く。そこに若い男が入ってきて、「まあ、まあ、まあ、おれたちも日本人だ。できれば見逃してやりたい。隊長、お願いします、かみさんはでかい腹をしているし、子供は小さい。何とか目をつぶってやってくれませんか」と、必死になって隊長と呼ぶ男に懇願し

ている。

これは狂言強盗であると気が付く。一人が脅し役、一人はなだめ役で、見逃してやるからと金品を巻き上げていくのだ。「かみさんも頼むんだ。お前も早く」と、夫の顔が険しくなり、今にも男につかみ掛かりそうである。私は引きつってかさかさになった舌をやつと動かし、「司令官つて、あの、ポロコフスキイさんのことですか？」と言うと、二人の男は、ぎくつとした表情をした。私は続けて夫に、「あなた、この間通訳を頼まれたのは、ポロコフスキイさんのすぐ下のイワンノリツツエさんだったでしょう。この人たちと一緒に行ってくれれば？」と言う。こちらも精いっぱい芝居である。ポロコフスキイも、イワンノリツツエも、みんなでたらめ。夫はロシア語なんか一言もできない。それでも男は、「知っているのか、ポロコフ」 「ポロコフスキイです」と、私が言い切ると、男は拳銃を下げて、「今日は見逃してやる」と、ふんぞり返り、同様な手口でせしめたらしい大きな荷物を若い方の男がかついで外へ出た。階段の下で、心配そうに見

上げていた何人かの前でもう一度、ダーンと拳銃を発射して走り去った。

私は、正人を抱いたままへたり込んだ。「おい、大丈夫か」と、夫がかがみこんで私の肩を抱く。「大丈夫じゃない！ 大丈夫じゃない！」と、私は泣き笑いしながら夫の胸をたたいた。その夜、私は陣痛らしい痛みを感じた。翌朝、産婆の資格を持つ安居の妻が、たすきがけで、夫と三人の子供を引き連れてやってきた。無論、柳瀬も張り切っている。近くの主婦たちも子供連れで集まり、今日は岡村の妻と柳瀬も仲が良い。偶然というか、あいにくというか、夫の元同僚が、ひょっこり顔を出して加わり、まるでお祭り騒ぎとなった。夫は、正人を抱いてうろろするばかりである。「男は来るな。子供は来るな」と、安居の妻が襖を閉め切って大声を出す。痛みの激しさにうなりながら、私はおかしく笑い出してしまった。

「さあ、もう一息、産まれますよ」と、安居の妻が声をかけ、柳瀬が私の手を握りしめると、「オギャー！」と、大きな一声、周りから拍手と歓声が沸き上がる。

たった一人で、産院で産んだ正人のときとは打って変わって、まるで衆人環視、大勢の歓喜の中に、次男の幸夫は産声をあげたのでした。

中国語のできる夫は日本人の家庭を回り、時計、指輪などの宝石類、美術品、毛皮、衣類、刀剣類を、裕福な中国人にあっせんする仕事を始めた。あごひげを伸ばし、いっばしの目利きのように振る舞い、家の中には預かり物の翡翠やダイヤの指輪があり、尻尾のちぎれた銀狐の襟巻を私が丁寧に縫いつけて、高値で売れたこともあった。大きな家具類を運ぶときは、何人かの手伝いを集める。仕事はしばらくは順調であった。

夫は、正人をデカ、幸夫をチビと呼び、外から帰るとまづ、「デカはよ、チビはよ」と声をかけるのが癖になっていた。

夫の周りにいつの間にか、会社の元同僚や知人が集まり、夫をまるで社長のようにおだてあげて仕事に手を出すようになった。そして、その商売のコツを覚えたと、たちまち自分たちで始めるようになった。初め

は夫の名前を使い、やがて夫よりはるかに巧みな話術と狡猾なやり口でわずかな品物を奪いあい、中には持ち逃げする者もあり、信用して品物を預けてくれる人は少なくなり、現金買い取りでなければ品物は動かなくなつた。

売り手、買い手も、だんだんと交渉が上手になり、元手が必要となつた商売は、目に見えて難しいものになつた。いつの間にか、家の中の物も現金化して元手にあてるようになった。

そんなある日、夫は、シャツとズボン下だけで帰ってきた。「これだ。これだ」と、両手を上げて笑つてみせる。ソ連兵に銃をつきつけられてホールドアップしたと言う。現金を奪われ、衣類をはぎ取られても、ソ連兵が相手では、ボロコフスキイもイワンノリッツエもあつたものではない。「怖かつたでしょう。命まで取られなくてよかつたじゃない。けがも無くて、よかつたわ、よかつたわ、怖い、怖い」と言つて、私は夫に酒を勧めた。「なにに、やつらは命までは取らないよ！」と、夫は強がつてみせた。

苦しいやり繰りの続く中、夫は、満州から逃げてきたという二人の少年を連れてきた。吉林省の奥の開拓義勇団にいたという二人は、共に十六歳で、その口から初めて満州奥地の悲惨な日本人の様子を知らされた。二人は、長い下痢続きで家へ入るや否や倒れ込んだ。「面倒見てやってくれ」と夫に言われ、私は粥を煮て貴重な卵を割った。乳飲み子を抱え、正人にも手の掛かる私には重荷ではあったが、海軍飛行兵である弟が、ひょっとすると生き延びていて誰かの世話になっているのかもしれないと思い、私は弟の面倒を見るつもりで二人を介抱した。驚くばかりの快復力で二人は元気になり、一カ月もすると夫について出かけるまでになった。しばらく夫の仕事を手伝っていた二人のうち、佐藤は、ある日ふっといなくなった。残る稲葉も、奈良郡山の地名と地図を書き、「内地へ帰ったらきつと会いに行きます。ここへもきて下さい」と、夫の神奈川中井の住所を書いた紙をポケットに入れて、やがていなくなった。大連の街のどこへ紛れて行ったのやら？ ほっと肩の荷が下りたようであり、

また少し寂しく、心配な複雑な思いが残った。

二人の少年がいる間に、柳瀬の家にも満州からの避難民がきていた。柳瀬の妹芸者妙子が、三歳になる女の子を連れ、自分は汚れた男の服で、ハルビンから逃れて柳瀬のもとへ転がり込んできたのである。柳瀬は、例によってお節介なほどの親切さで面倒を見る。

そのうちに、妙子の夫という男がきて一緒に住むようになった。男は朝鮮の人であった。男がきて間もなく、妙子は子供を柳瀬に預けて、男と二人で毎日のように出掛けるようになった。ときには帰ってこない夜もある。女の子は、本当に妙子の子供であろうか。なぜかいつもおどおどして、上目使いに人を見る。親であるはずの妙子にも男にも甘えず、和子が遊ぼうとしても身をすくめる。妙子は目に見えて身なりが良くない派手になり、ときにはかなりの金を礼金として柳瀬に渡すようになった。

佐藤たちが姿を消してしばらくしたころ、柳瀬と妙子たちはけんか別れをした。妙子たちは、松風台に近い逢坂町おとさかまちという一画の娼妓街で、売春のあっせんをし

ていたのだった。切羽詰まった女の相談相手となり、急場をしのぐために、一度だけということ客の相手をさせる。今までは高嶺の花だった日本の女を、中国人は喜んで抱く。たった一度だけの約束の女が、また妙子の前へ姿を現す。「こんな金、こんな金」と、柳瀬は金を妙子にたたきつけて、「出て行け」とどなった。妙子たちは出て行った。

柳瀬は、「せいせいしたわ!」と言いながらも、あの女の子の上目使いが忘れられないという。

満州から、旅順から、避難民が大連へ入ってきた。髪を短く切り、顔を汚し、男の服装の女、やせた子供、むくんだ顔の男たち。初めは近くの日本人小学校に收容されたが、日増しに募る寒さに、机、椅子はすぐ燃料としてたたき割られた。夜が明けると一人、翌朝にはまた一人と、首をつっていると噂が広がり、このままにはおけないと、家主の添島が声をかけて、各戸で避難民を引き取るようになった。終戦以来、一度も家賃を取らない添島の提案に、みんな同意せざるを得ず、私たち一家は、柳瀬の家へ引越して

一軒を空け渡した。入ってきたのは三大家族十三人。それぞれ避難民を引き取った家からも布団を持ち寄り、私も一組の布団と台所用品をそのまま残して、柳瀬との共同生活に入った。岡村が引き受けた若い男三人のうち一人は、「コーヒーが飲みたい、コーヒーをください、コーヒーを」とうわごとを言いながら息を引き取った。自分たちの生活のほかに避難民を助けていくのは生易しいことではない。ストーブの石炭を確保するのも大仕事である。

「国のため」と信じて満州へ渡り、終戦前でも開拓は楽ではなかったとは思う。日がたつにつれて不平不満が募り、誰もが意地悪くとげとげしくなる。

長い冬がやっと過ぎた四月ごろから内地への引揚げが始まった。まず第一優先は避難民からである。しかしこの日を待てなかった人が三人いた。

昭和二十一年の十月末にはほとんどの避難民の引揚げは終わり、松風台は、元の住民だけの町になった。さあ、今度は自分たちの番と一同待ち構えたが、ぱったりと引揚げの話はとだえた。

夫の仕事はいよいよ行き詰まり、石炭の無い日は着膨れて、湯たんぼを入れた布団に子供たちを入れっぱなしにし、台所からガス管を引いて部屋の中で炊事をする。豆乳を子供に飲ませ、私たちは赤い高粱を何度も水にさらしてあくを抜き、粥にしてすすむ日もあった。柳瀬は、何十枚もある着物を、夫を通して、一枚、また一枚と売りながら、内地へ帰ったときのためにと宝石類は手放さずに、しっかりと私たちとの別世帯を守った。静岡へ帰っても、満州へ芸者に出した親分は当てにはならない。帰れば和子を小学校へ入れ、自分も子供連れでも働ける場所を探すと言う。また芸者に出るか、酌婦になるか、料理屋の女中になるかであると言っていた。「須藤さんは、本当に正直で善い人よ。善すぎる人よ。でも世の中には善い人ばかりじゃないし、それだけではやっていけないのよ」とも言っていた。柳瀬のさばさばした生き方がうらやましかつた。「静岡へ帰れば、その日から宿探したもんね。でも、私を拾って大連で良い暮らしをさせてくれた旦那と和子のために、二度と旦那は持たないで、和子を女

学校へ上げてお嬢様に仕上げるの」と言う。私のように夫に頼り、夫の実家をあてにして引揚げを待つ身にはまぶしいばかりであった。

「さあ、暖かくしてやるぞ」と夫が石炭を背負い大きな荷物を抱えて帰ってきた。子供たちも、柳瀬親子もストーブを囲む。荷物を開けると味噌のおいが広がる。会社と穀類の取り引きのあった中国人が、安く卸してくれたと言う。夫は私に「味噌を売ってくれるか?」と言う。薄いパラフィン紙に、柳瀬も手伝って小分けにして行商に。一緒に行けると喜ぶ正人を背に両手に重い荷物を持ち、さてどこへ……。まず訪れた添島の妻は、快く一包みを買ってくれて、「品物が良さそうだから、隣へも行ってみたら」と勧めてくれた。意外なほどその味噌は売れた。最後に寄った家の主婦は、まゆをひそめて、「買ってあげるけれど、子供連れは感心しないわ。できたら子供は置いてきて。哀れっほくて嫌よ!」と敵しいことを言った。そんなつもりではなかったのに、正直なその主婦の言葉が心にしみた。

夫は、安い物でも預かって手まめに歩き、時々、味噌を仕入れてきた。初めは顔を伏せ、おずおずと裏口を回っていたが、案外な売れ行きに自信もついでだんだんと遠くへ足を延ばすようになった。以前、子供連れに苦情を言った主婦も、「もうそろそろ来る頃かと待っていたのよ」と言うようになった。もちろん、行商に出る時には子供を夫に預けていった。

きれいに売って身軽になった私は、思い切つて魚を扱っている店に寄つて少し余分に牡蛎かきと野菜を買ひ、久し振りに浮き浮きと家へ帰ると、客がきていた。会社の元同僚二人と機嫌良く話をしている夫の横に酒の一升瓶が立っていた。柳瀬が襖を細く開けて、「いいかげんにあしらいなさいよ」とささやく。夫は、酒をもらったから牡蛎鍋にしようと思ふ。夫の仕事を手伝つたこともあり顔を覚えていた二人は、「奥さん、久し振りです」と、愛想が良い。二人は酒は飲まずに、ガツガツと牡蛎鍋をむさぼっている。鍋は、恨めしく空になった。せつかく今日はご馳走をと楽しみに帰ってきたのに、男たちは、「じゃ、明日必ず」と、

上機嫌で帰つていった。夫は、久し振りの酒に陶然として、「友達つて良いもんだ」と繰り返していた。私は汁ばかりとなった鍋で粟飯を煮込んで子供たちと口にしながら、一かけらも残っていない牡蛎鍋を見て悔しくて腹立たしかった。

仕事をやめた縫製工場に工業用のシンガミシンが十台という出物がある。幸いに、何人かの買い手がつき、明日その引き取りと配達を、仲間の一人となつて手伝つてほしいとのこと。売り手が急いでいるので、今日これから手付け分でも入れないと、みすみす他人にもうけ話を持つて行かれてしまうので、夫にも一口乗つて金を都合してほしいと。手付金の一部を渡したと言う。私は心の中で、「しまった！」と叫んだ。まだ牡蛎の恨みも残っていて、「今そんなうまい話なんてないわ、だまされているんでしょう」となじると、夫は気色ばんで、「お前も疑い深い女になつたな。人間も住んでいる所も分かつている友達だぜ。友達」と腹を立てた。「渡した金の十倍になるもうけ口だ。しばらく味噌を売らなくてもいいぞ!」。翌日夫は張

り切って出かけたが、柳瀬は、「危ない、危ない」と首をすくめていた。夕方になって夫は黙って帰ってきた。その顔色で、結果は分かっている。「だまされる方で良かったじゃない。だます方だったら、親子四人、どこへ隠れるのよ」と、内心は穏やかではないが、平静を装う。

夫が訪ねた住所は縫製工場などではなく、普通の住居で、声をかけるや中年の女の人が、「須藤さんですね」と飛び出してきて、「残りの金を持ってきてくれましたね」と言うので、「残りの金？」といぶかる夫に、その女は、「昨日、一台あったミシンに良い買い手がついた」と、かねて頼んであった二人の男が、手付金を置いて運び出し、「残金は同じ会社の元同僚の須藤という男が持ってくるから」と、農事会社時代の名刺を渡して行ったと言う。夫はすぐにそこを飛び出し、二人の家を探したが、既にそこは他人の住まいになっていた。聞き回った知人たちは、口をそろえて、「あの二人は、借金と詐欺を重ねていて、今はだれも相手にしない」と言ったとのこと。夫がどんな思いで

二人の男を捜し、知人の家を駆け回ったことであろう。「その女の人も仲間ね。きつと、ミシンなんて初めから一台も無かったのよ」「そうかなー」と、それ以上は何も言わずに、昨日持って来た酒の残りを流してしまった。

五 引揚げの決定

昭和二十二年一月、引揚げの話が身近となり、添島の家へ集まることが多くなった。

引揚げの日のためにと残しておいた紺のスーツも、夫の金歯も、食べ物になってしまった。集まりの度に夫は顔を出すのが、引揚げの順番は回って来ない。「お前が行っても同じだよ」と言う夫に、無理に子供を押しつけて、私は集まりに出かけた。私は、添島を中心に集まっている人々の前で、自分でも思いがけない両手をついていた。

「お願いします。この次の引揚げに入れて下さい。もう限界です。このままでは子供が持ちません。助けてください」と言うと、涙がほとほと手の上に落ちていた。みんなはしばらくあっけにとられていたが、

添島が静かに、「みんな早く帰りたいんですよ。だれも同じですよ。男手のない女世帯、老人や体の弱い人のいる世帯を先にと選んでいるんです」と言うと、妻を亡くした吉沢が口を挟んだ。「そんなこと女房に言わせないで、困っているなら困っている、須藤さんがきて言えはいじじゃないか。いつものんきな顔で、景気の良さそうな話ばかり言っているじゃないか」「女に重たい物を持たせて行商させ、自分は子守かい」と、他の男たちも口を出す。みんな自分たちの引揚げに必死で、ふだんは好意的な人たちまで一緒にになって言っていた。突然、柳瀬が大きな声を出した。「何よみんな。寄ってたかって、ひどいじゃないの。あんた方がいない間、みんながどれだけ須藤さんの世話になったと思うの。須藤さんがあんたたちに何をしたら、須藤さんが何か頼まれて嫌と言ったことがあるの。女世帯からというなら、私を一番後にして須藤さんを帰してやってよ」と、唇を震わせて、ぼんぼんとたたきつけるように言って、私を促して外に出た。「今日の話は、旦那さんには言わない方がいいわよ。」

黙っていなさいよ」と言った。

二日ほどして添島がきて、次の引揚げに私たちと柳瀬が決まったと告げた。私と柳瀬は思わず抱き合った。三日後に迎えのトラックが来る。引揚船は、「遠州丸」だと言う。さあ帰れるんだ。帰るんだ。その日までの布団だけを残し、どんながらくたも売り払い、パンや芋饅頭、ビスケットに替えて、子供のおしめに使う衣類と共にリュックサックに詰め込んだ。夫も私も着れるだけ着込み、夫は正人を、私は幸夫を背負い、前にも両手にも荷物をぶら下げ、まるでチンドン屋のお化けのようだった。柳瀬も和子も着膨れて、大きなリュックサックを背負い両手に荷物をぶら下げている。

岡村は造船所が手放してくれず、安居は、「散々だまされた国に帰れるか、おれたちは。日本人でなくたっていいんだ！」と残留を希望した。塩川一家五人は、七十歳近い母親を抱え、長男が兵隊で牡丹江におり、また、内地に帰っても身を寄せる所は無い。「息子は必ず大連へ帰って来る。そのときにここにいてや

らなければ困る。息子がここに帰って来るまでは動かない」と、やはり残留を希望。吉沢ほか、現地召集から帰ってきた人たちの家族は、次の引揚げを待つことになった。何人かが見送りに集まりトラックの到着を待った。幸夫を取り上げてくれた安居夫妻は涙ぐみながら、「幸坊、幸坊」と私の背中へ声をかけていた。トラックには、よその地域から、ほぼ満員に引揚者を乗せていた。やっと引っ張り上げられたとたんに動き出した。三寒四温の温に入ったよく晴れた二月の空であった。さらば大連、さらば松風台。

六 帰国

ソ連兵に、乱暴に小突かれながら、大連埠頭の倉庫に入り、凍りつく寒さの中で一夜を過ごし、翌日午後、やっと引揚船「遠州丸」に乗り込んだ。「病人は乗れません。病人は申し出て下さい。病人は乗れませんよ！」と声を掛けて回る船員の前を、みんな無理に背筋を伸ばして歩く。貨物を積むような船底に何班かに分かれて割り当てられ、柳瀬とは別の班になった。荷物を置くと、みんなが座るのがやっとで、とて

も手足を伸ばして寝ることはできない。みんながどうやら落ち着くと、船医が見回ると言う。「みんな、しゃんとしてくださいよ」と、ささやく声が小波のようにみんなに伝わる。青白い顔でぐったりしている者も座り直す。船医は、だれ診るでもなく、目をそらしながらすーっと通り過ぎて行った。全員健康というところになったらしい。

ドラが鳴り、汽笛が響いて、「遠州丸」は動き始めた。拍手と歓声がかかる中を船員が声をかけて回り、「皆さん！ ご苦労様でした。ここからはもう日本ですよ。もう心配はいりません。安心して、元氣を出して、みんな仲良く、仲良く帰りましょう」。船の中ではよく分からなかった「仲良く」の意味が、やがて諫早へ着いてうなずけた。

喜びのざわめきが収まると、船内には重苦しい空気が漂ってきた。故郷へ帰り着いてからの生活の不安、離散した家族の安否など、引揚者は、ともすれば暗い顔を寄せ合うようになる。

船員は親切であった。食べ物を配り、私のように幼

児を抱えている者には、時間を区切って、おしめの洗濯を許し、熱いブリキの「湯たんぼ」を差し入れてくれた。

翌日、飛び入り自由の余興大会が催された。四斗樽を伏せて舞台とし、樽の上に端然と正座して朗々と謡曲を謡いあげる者、「八木節」「ラバウル小唄」は合唱となり、柳瀬が軽妙な「都々逸」でみんなを沸かせた。「ほかにいせんか、もうありませんか。出演者には賞品が出ますよ」と、船員の賞品という言葉につられて私はふらふらと進み出た。「いいぞ」と声がかかる。「青い背広」を歌い終わっても、拍手がなくなりとしていた。下手だったからかと樽を下りかけると、拍手が沸いてきた。アンコールである。私は、「小さな喫茶店」さらに続けて、「出船」を歌った。泣きながら聞いてくれる人もいる。長い間、口にしなかつた歌詞が、不思議によとみなく口をついて出た。大きな紙袋にいったいの乾パンをもらって拍手の中を面映ゆく戻った席で、正人と幸夫が手をたたいていた。

隣の班でその夜一人が息を引き取った。声を殺したすすり泣きが聞こえるのはつらいことであつた。乗船間際に、船員が、「病人は乗れません」と叫んでいたのは、これだったのか。また、船医が、何とか日本まで持てばと、見て見ぬふりをしたのも分からなくはない。「おーい、帰ってきたぞ！ 日本が見えたぞ！」と叫ぶ声に甲板に駆け上がり、水平線の右隅にちよんとつまんで置いたように、小さな緑が見えた。その薄い緑は、ゆっくりゆっくりと膨らみ色を濃くして近寄ってくる。安どと期待と不安の入り交じった表情で大勢が甲板に集まる。

優しかった船員にあいさつし、見送られてタラップを下りた一同を出迎えたのは、銃を持ったアメリカ兵であつた。DDTを頭からかけられ、随所に立っているアメリカ兵の監視の中を、巨大な「ゴキブリ」の列となつて、三十〜四十分歩いてようやく旧軍兵舎である宿舎へたどり着いた。何の仕切りもない、だだっ広い板敷きの床に、班を組み替えて割り当てられ、柳瀬とは別れのあいさつを交わすこともなく離ればなれに

なり、その後再び会うことはできなかった。親切だった「遠州丸」の船員とは大違いで、ここ諫早の収容所の職員はよそよそしくて冷たい。切り口上でいろいろと指図していた。

仮設の電報取扱所で延々と並び、夫の実家と私の実家へ。大空襲での消息を案じながらともかく元の住所へウナ電を打った。女の職員の声で、「皆さん、ご苦労様でした。ここは長崎の諫早です。よく御無事で帰って来られました。二、三日後に列車の用意ができません。もう少しの辛抱です。それから大事なことです。満州、大連などで暴行されたり、そのための妊娠と思われる人は、必ず医務室に行ってください。覚えのある人は必ず検査を受けてください。決して恥ずかしいことではありません」と、繰り返して放送があった。

その夜、夫は、「ちよっと行って来る」と言っ出ていったが、しばらくすると何やらどなり合う声が出て、それが喚声となり、さらに悲鳴となって、ただならぬ物音もする。私は、子供を引き寄せて耳を塞いで

いた。ドタドタドタと、乱れた足音がして、全裸の男が隣の班の人の中に飛び込んできた。「きゃーっ」と、周りが悲鳴をあげたが、男は中腰になって、鍋か洗面器のような物の中へ放尿を始めた。背中がわなわなと震えている。すぐに血相を変えた四、五人の男が追い掛けてきて、男を引っ張り出そうとする。母親らしい女が裸の男に覆い重なって、「許してやってください。この子が何をしたというんですか？ これではこの子は死んでしまいます。許してください」と、しわがれ声を振り絞るが、男たちは荒々しく、「殺しはしないよ」と、裸の男の両腕を引きずって行った。その騒ぎは深夜まで続き、夫は高ぶった顔で帰ってきた。集団リンチにあった中の一人は死んだと言った。

満州や大連で同胞を裏切り、悪事を重ねた人間を引き出してリンチにかけたとのことだ。よほどの事をしてきたのか、女も裸にされて情け容赦なくたたきめられたとか。あの狂言強盗の一人、若い男の方も頭を抱えて、ヒイヒイ泣いていたという。アメリカ兵は、ニヤニヤ笑いながら眺めていたが、やがて写真を撮っ

たとのことで、敗者と勝者の明暗がくつきり現れていた。隣の班のあの全裸の男は、目鼻の見分けもつかぬほどに顔をはらして、ふらふらとして母親の元に戻ってきた。

「遠州丸」の船員は、このリンチが船内で起こることを恐れていたのである。

このリンチ殺人事件の調べで、引揚列車に乗るのが十日以上も遅れることになった。とんだ迷惑、とんだとぼっちりであった。手出しはしなかったとは言いが、みんなの中に交じってはやしたてた夫が恐ろしくなった。

しばらくして、正人の様子がおかしくなってきた。立とうとしなくなり食欲も無い。私は正人を背負って医務室に行つて、顔色の悪い人々の列に並んだ。医学生らしい若者が、てきばぎと患者を診るというよりさばいていた。散々並んで、ビタミン剤をもらつて帰る。暖かいはずの九州に、二十年ぶりという大雪が降った。人間が草や木のように、水だけで生きて行けたらどんなに良いだろうかとこのときに思った。船で

もらった乾パンを湯に浸して食べさせた。男達が受け取ってくるのは、ぼそぼそとした得体の知れない主食とさつま芋の茎の煮物ばかり。ただ一度、特配として生の人参が半分あて配られた。果物ナイフで薄くそいで、みんなで口にする。食事ではなくえさである。こんな状態で、何日もとどめられてはたまらない。

みんなは、宿舎を抜け出し近くの農家をたずね、白米の握り飯やふかし芋を買つてきて、周囲の目を盗むようにして食べた。

私は毎日医務室へ行き、正人にビタミン剤をもらつてきた。カルテも何も無い。患者には、何でもビタミン剤であった。

米の御飯が食べたい。私は、幸夫を背負つて雪の残る道を、教えられた農家へ急いだ。

農家の軒先で、「おむすびを売ってください」と言うのと、その家の主婦は、品定めをするように、じろじろと私を見て、「何を持ってきた？」と聞く。「何を？」私は何のことか分からず戸惑っていると、「へえっ！」と吐き捨てるような声を出して、「金はうな

るほどあるんだ。何か品物を持って来なくてはやれない。自分達も有り余っているわけじゃない。自分の食べる量を削ってやっているんだから」と、けんもほろろ。この家を教えてくれた宿舎の人は、一言もこういう事は言ってくれなかった。まるで、犬か乞食でも追い払うような手振りに、私は唇をかみしめ、がっかりして雪の道を帰った。この屈辱、諫早という忌まわしい地名と共に生涯忘れるものではない。

七 正人の死

諫早に着いて十三日目に、やっと引揚列車に乗った。ようやく、この嫌な諫早から離れる事ができた。引揚げを二度経験した思ひである。全員が席に着くことができ、有り難いと思った列車も、次の駅からはさまざまに買い出し列車となった。窓から乗り込む男、どなりわめく女、大きな荷物に身動きのできない車内。内地の人も苦勞して生きているという現実の厳しさが身にしてみる。

引揚者には、所々で弁当とお茶が窓から差し入れられ、「病人はいませんか」と、学生らしい若い男が窓

からやはりビタミン剤をくれる。だれが乗ったのやら降りたのやら、夜も昼も朝も分からずに、二月二十二日、列車は正しく神奈川県二宮駅に到着した。降りたのは私たち四人だけ。あの列車の騒がしさはうそのように、二宮駅は人けがなくひっそりとしていた。

夫は私たちをベンチに残したまま出て行ったが、やがてトラックに乗って戻ってきた。復員していた友人が、快くトラックで家まで送ってくれると言う。本当に戦争があったのか？と疑いたくなるほど二宮の町はもっていた。私たちは荷台に乗り、土ほこりを巻き上げガタガタと揺れながら見覚えのある町並みを通り田舎道へ入った。帰り着いた夫の家の門をくぐると、陽光の光あふれる庭にいた姑が、「あれえ！」とすつとん狂な声を出して、みんなを呼び寄せた。私たちよりも一年も前に、一家五人無事に満州から引き揚げていた兄、子供が二人になっていた次の兄、そして妹の大部分に、私たちが加わったのである。「遅かったなあ、お前たち。せめて電報でもよこせばいいのに」「電報

打ったよ。それも二回も」「電報なんか一回も来ないよ」ということである。あのウナ電と電報料金は、どこへ消えてしまったのであろうか。

親戚の医者が二人きてくれた。二人の子供のために、兄嫁たちは鶏の骨をたたいて煮出した骨髓スープを作り、搾りたての牛乳、産みたての卵、野菜ジュースなどを用意してくれた。三日もすると幸夫は元気になり、広い家の中を喜んでちよろちよろ走り回るようになったが、正人は起き上がれない。

姑は私たちの着てきた衣類を洗い、二人のおしめも洗ってくれて、「お前は何もしなくてもよいから、正人に付きつきりでいろ」と言ってくれた。重湯やスープ、牛乳を口にはするが、元気が出ない。二人の医者も毎日診にきてくれた。家中の者が正人の快復のために力を貸してくれていた。聞きつけた近所の家からも、卵や牛乳よりも良いからと、山羊の乳が届く。少し顔色が戻ったように思う。「坊や」と呼びかけると、笑顔を見せるようになり、「助かった。これで助かった」と、夫も私も胸をなで下ろした。

二月二十八日の夜、正人に添い寝をしていた夫が、「おい！ デカはもう駄目だ」と言う。「そんな？」と、私が高きでそくと、正人は夫の腕に抱かれたまま目を閉じて、「ひえっひえっ」と、小さくしゃっくりをしている。「坊や、坊や」と呼びかけても、目を開けようとはしない。

正人は、こうして夫の腕に抱かれて息を引き取った。みんなが起きてきて、静かに回りを囲んだ。私は、ふとその中に柳瀬を見たように思った。

あの諫早のリンチ事件が無かったならば。十日早く帰りついていたら、正人は死ななかったはずである。もう十日早く帰っていたらと思うと、その十日間を守りきってやれなかった自分の無力が悔しい。「ごめんね、坊や。ごめんね、正人」と、私は冷たくなっていく正人の顔や体をなでさすりながら、夫が「もうよせ」と止めるまでささやき続けた。

その後、夫も私も、諫早の地名とリンチ事件のことを口にはしない。しかし決して忘れはしない。